

## 『センチメンタル・ジャーニー』と血液循環説

木戸好信

Nature instantly ebb'd again,—the film returned to its  
place,—the pulse fluttered—stopp'd—went on—throb'd—  
stopp'd again—moved—stopp'd—shall I go on?—No.

—Laurence Sterne, *Tristram Shandy*

## I

夏目漱石をして「善く笑ふものは善く泣く、『スターン』豈涙なからんや、『トリストラム、シャンデー』を読んで第一に驚くは、涙と云う字の夥多なるにあり」<sup>1</sup>と言わしめたと同じく、ロレンス・スターンのもうひとつの代表作『センチメンタル・ジャーニー』には、そのタイトルからも察するとおり「涙」という言葉、さらには涙を表す記号としての「ハンカチ」という言葉が頻繁に登場するし、案の定、“Sentimental Traveller” (15)<sup>2</sup>と自称する主人公ヨリックはといえ、行く先々ですぐに感傷的になってしまう。そして実際、登場人物たちの感情の動きを描写する際にスターンが使用する表現もこれまた微笑ましいまでに紋切型の一本調子なのだ——つまり、すぐに「顔を赤らめる」のである。<sup>3</sup> この小説がそれに続くいわゆるセンチメンタル・ノヴェルと呼ばれる一群の小説が生まれる機縁、少なくともそれらの小説の中心にあると言われていることは多くの文学史の入門書が示すところである。“sentiment,” “sentimental,” “sensibility”というそれぞれの語が、単なる「感情」、「風雅な」、「感受性」から18世紀後半に「情感」、「感傷的」、「多感さ」へと意味が変化し、さらには、しばしば現代的な軽蔑の意味での

センチメンタル、つまり、「極度の感受性が生み出す浅薄さ」や「偽りの感情」、「嘆きや心痛への耽溺」を意味するようになる。<sup>4</sup> スターン自身の“sentiment”は「洗練された優雅な感情」の意味だそうであるが、<sup>5</sup> 現代の読者からするとその感受性の発露はあまりにも過剰に見え、単なるお涙頂戴的な作品かと一見感じられてしまう。しかし用心深い読者なら「涙」や「ハンカチ」、あるいは「顔を赤らめる」こと以外に、ヨリックとその他の登場人物たちの感受性の発露を機能的、生理学的に表現する言葉が頻繁に使用されていることにすぐに気が付くのではないだろうか。その言葉とは「心臓」であり「鼓動」であり「血管」であり「血液」であり「動脈」であり「脈搏」である。スターンが当時すでに人口に膾炙していた医学、生理学に親しんでいたのは明らかだ。そして、ことウィリアム・ハーヴェイ (William Harvey, 1578-1657) の血液循環説に関して、以下の論考はハーヴェイの血液循環説というものがその内容と形式の双方においてスターンの『センチメンタル・ジャーニー』というテキスト全身の隅々にまでいかに澁みなく行き渡っているかを示すものである。

## II

まずは『センチメンタル・ジャーニー』の冒頭の場面から見てみよう。ここで、語り手であるヨリックは自らが旅行するきっかけとなった動機を述べるのだが、その際、目的地であるここフランスでの食事の最中、“had I died that night of an indigestion, the whole world could not have suspended the effects of the *Droits d'aubaine*” (3)と、「消化不良」で死に、さらに、そのことによって「外国人財産没収法」(“*Droits d'aubaine*”)によって、すべての財産を王の名により没収されてしまうことを非常に心配し、“But I have scarce set foot in your dominions—” (4)と訴えかける。しかし、ヨリックは食事が終わるとすぐに「フランス国王の健康」(“the King of France's health”)を祝して乾杯しながら、もう仲直りしたと述べ、“the

Bourbon is by no means a cruel race: they may be misled, like other people; but there is a mildness in their blood. As I acknowledged this, I felt a suffusion of a finer kind upon my cheek—more warm and friendly to man, than what Burgundy (at least of two livres a bottle, which was such as I had been drinking) could have produced.”(5)とまで言うに及ぶ。

ここには本作品の構成にかかわる重要なことがすべて凝縮されている。先ず重要なことは、ヨリックの感情の表現が「わが頬に心地よい血のみなごりを覚えた」というような循環器系の言葉で表現されていることである。「消化不良」という消化器系の問題が最後は循環器系の表現によって国王と和解したことが示されていることも記憶に留めておこう。ヨリックがここで話題にしていることは、国王の領土、国王の健康、国王の血筋であり、常に王の身体とその支配する国家というものが照応関係をもつことが強調されている。身体を国に、あるいは逆に、国を身体になぞらえる比喩は近代の医学、生理学はもちろん哲学においても繰り返されてきた。中でもハーヴェイ自身が血液循環の中心である心臓を国王になぞらえる有名な比喩を用いていたことを思い出そう。<sup>6</sup>そしてスターン自身もまた『トリストラム・シャンディ』において身体を国になぞらえる比喩を頻繁に使用していたし、さらには、病気というものを血液の循環と関連付けて次のように言っていた。「『病気』というのがこの場合父のこのんだ比喩で、それは父をさらに立派なアレゴリーに仕立てて、国という体も個人の体の場合もまったく同じこと、血液も精気もあたまのほうにばかりサッサとのぼって、下りてくる方の速度はとてもそれに及ばないということになれば、——必然的に循環の梗塞がおこる、これはどちらの場合も死を意味する、と主張するのです」(1-18)。別の場所でもこれと同じ趣旨のことが繰り返される。特に、スラウケンベルギウスの鼻が本物かどうかをめぐって、様々な人々が、医学、生理学を披露しつつ議論し合う場面では、この物語の語り手は、学者たちが論争の出発点において「循環論法」(“*petitio principii*”)に頭をぶつけていると指摘し、さらに、そ

これらの学者たちの一人は血液の循環について、「鼻が血を出すためには、一人の論理家が弁じました、血がなければならぬ——それも、何でも血でさえあればよいというのではなく、——鼻の中を流れている血があって始めて、ポタポタと滴り落ちる出血現象が可能になるのだ——（その滴り落ちる頻度が高いと血が流れるというわけだが、この場合むしろそれも含まれている、その男はいいました）——ところで人間の死とは、とその論理家はつづけて、体内の血が澱むことにほかならぬのだからして——」と述べる。

血液循環の原理を至上命令とする『センチメンタル・ジャーニー』においても、その内容及びその語りにおいて、「流れが澱む」ようなことは決して許されない。“Sentimental Traveller”たるヨリックにとって、フランスを旅するということはすなわち国王の身体たるフランス国内を循環の梗塞がおこらないように旅することに他ならず、このような観点から見れば、物語の中程にあるヨリックとパスポートの取得をめぐる長いエピソードの適切さもよく理解できる。そこでは血液の循環がパスポートの問題、つまり、王の身体を通行するという〈交通〉の問題として強調されるというわけだ。さらに、このパスポートの問題で注目すべきは、ヨリックにパスポートを手配してくれるシェイクスピアを愛読する英国最員のB…伯爵が、ヨリックのことを『ハムレット』に登場する王の道化ヨリックと同一視するところである。面白いことに、B…伯爵が手配してくれたパスポートにさえ“to let Mr. Yorick, the king's jester, and his baggage, travel quietly along” (116) と記述され、B…伯爵の誤解は解けぬままであるが、ヨリックは結局、そのパスポートで納得してしまう。パスポートがなければ投獄されてしまうとあれほど心配していた人間が、偽物のパスポートとは言わないまでも、少なくとも不実記載されたパスポートで満足するのは一見矛盾しているように見える。しかし、ここでもう一度、国王の領土、国王の健康、そして国王の血筋についてヨリックが述べている冒頭の箇所を思い出そう。カントーロヴィチひそみの掣ひそみに倣うならば、それは王が自らの身体のうちに〈自然的身体〉と〈政治

的身体)という二つの身体を持つということであった。<sup>7</sup>つまり、パスポートをめぐる、二人のヨリックのエピソードは、「王の二つの身体」を「道化の二つの身体」に〈さかしま〉にしたスターン一流のパロディーに他ならない。言い換えるなら、〈自然的身体〉としてのヨリックは『ハムレット』のヨリックとは違うが、〈政治的身体〉のヨリックとしては、『ハムレット』のヨリックの道化の役割を背負い込むことで、彼の権利をもそのまま受け継いでいるが故に、B…伯爵が用意した例のパスポートでヨリックは十分に満足できたのだ。

フランス国王の身体たるその領土において、血液が澱むことなく円滑に循環するという運動こそが、ヨリックがトラブルなく順調に旅を続けていくこと、すなわち、プロットが進むことに他ならない。そしてこの旅の過程において、ヨリックは様々な経済活動——ヨリック自身の用語を使うならば、“sentimental commerce” (13) ——を行うのだが、この彼のおこなう経済活動自体もまたすべて血液循環の原理にしたがって営まれていることに注目しよう。

作品の冒頭において、もし自分がフランス国王の領土で消化不良で死んだら「外国人財産没収法」の効力は誰にも止められないとヨリックは危惧していた。ここで暗示されるのは循環の梗塞である「消化不良」による財産の没収、つまり死である。血液の循環が健康にとって重要なものと同じく、経済システムを良好（つまり健康）に保つには、富、資本もまた循環し続けなければならないのだ。ヨリックは「外国人財産没収法」について嘆き、続けてこのように言う。

— Just God! said I, kicking my portmanteau aside, what is there in this world's goods which should sharpen our spirits, and make so many kind-hearted brethren of us, fall out so cruelly as we do by the way?

When man is at peace with man, how much lighter than a feather is the heaviest of metals in his hand! he pulls out his purse, and holding it airily and uncompress'd, looks round him, as if he sought for an object to share it with—In doing this, I felt every vessel in my frame dilate—the arteries beat all chearily together, and every power which sustained life, perform'd it with so little friction, that 'twould have confounded the most *physical precieuse* in France: with all her materialism, she could scarce have called me a machine —(5)

つまり、ヨリックにとってお金を使うということは、「体内のあらゆる血管がふくれ——動脈は楽しみに脈打ち、生命を支えている活力全部がほとんど何の障害もなしに活動」すること、すなわちそれは血液が循環することの謂に他ならない。実際、ヨリックのおこなう経済活動はすべてこの「循環」という運動自体を純粋に蒸留して抽出したものである。つまり、旅行中に彼がおこなう“sentimental commerce”は通常の経済活動には必ず伴うべき、使用価値、交換価値、あるいは余剰価値といったものを超越したところにあり、それはすなわち、ヨリックにとって、そしてスターンにとって、貨幣に代表される富や資本というものが血液と同じくただ「循環」、つまり〈流通〉することそれ自体が重要であることを強調するために他ならない。

ヨリックは馬車の購入を即断した後に、“I never finished a twelve-guinea bargain so expeditiously in my life”と言い、そして続けて、こういった様々な経験について、“the pleasure of the experiment has kept my senses, and the best part of my blood awake, and laid the gross to sleep.” (36) と述べる。その他の多くの経済活動についても同様である。例えば、托鉢僧との煙草入れの〈交換〉、あるいは物乞いたちに、そして物乞いをしない仲間の一人にさえお金を与えること、あるいはヨリックが本屋で出会った小間使いに与えたクラウン銀貨——その小間使いはヨリックにもらったそ

の銀貨専用の袋まで作り、使わずにお守りにして、銀貨は貨幣としての価値を剥奪されている。あるいは、召使としての仕事を何も出来ないラ・フルールを召使として雇う、等々。<sup>8</sup>

こういった“sentimental commerce”の中でも、ヨリックが女店主(“Grisset”)から自分にとってまったく必要のない手袋——しかもヨリックは彼女がもっと値段をふっかけてくれたらと願ったりまでする——を買うというエピソードは決定的である。この女店主との一連の場面には「脈搏」(THE PULSE)と題されたセクションまであり、ヨリックが実際にこの女店主の脈をとる場面が長々と、しかも詳細に描写されている。

if it is the same blood which comes from the heart, which descends to the extremes (touching her wrist) I am sure you must have one of the best pulses of any woman in the world—Feel it, said she, holding out her arm. So laying down my hat, I took hold of her fingers in one hand, and applied the two fore-fingers of my other to the artery—

— Would to heaven! my dear Eugenius, thou hadst passed by, and beheld me sitting in my black coat, and in my lack-a-day-sical manner, counting the throbs of it, one by one, with as much true devotion as if I had been watching the critical ebb or flow of her fever—How wouldst thou have laugh'd and moralized upon my new profession? — and thou shouldst have laugh'd and moralized on — Trust me, my dear Eugenius, I should have said, “there are worse occupations in this world *than feeling a woman's pulse.*”— But a Grisset's! thou wouldst have said — and in an open shop! Yorick —

— So much the better: for when my views are direct, Eugenius, I care not if all the world saw me feel it. (71)

脈をとるといふ「新しい職業」に転職したヨリックは、この女店主の亭主が店の奥から出てきてさらに脈をとり続ける。そして彼女に“— And how does it beat, Monsieur?”と聞かれ、“— With all the benignity”と答えていたちょうどその時に、小僧が手袋を持って店に入ってくる。するとヨリックは突然、ついでにわたしも手袋を一つもらおうと言い出し、しかも、サイズの合ったものは一つもなかったにもかかわらず、結局要りもしない手袋を購入する。

しかも、なぜ手袋なのか。もちろんこの「脈搏」に続くこのセクションの題名は「手袋」(THE GLOVES)となっており、単なる作者の気まぐれではない。そういえば、確かハーヴェイもまた著書の中で脈搏を手袋に喩えこう表現していた。「動脈の脈搏は左心室からの血液の衝撃によって生ずるものであって、その様子は、あたかも、人が手袋を吹きふくらませると、その手袋の指がすべて同時にふくらみ、脈搏を彷彿させるようなものである」(54)と。

血液循環の原理には、〈交通〉や資本の循環である〈流通〉や〈交換〉といった意味がこめられていることはすでに述べた。これを二つの国家との関係においてみると、ある意味〈戦争〉というものも国と国との〈交通〉の一形態だといえるのではないだろうか。ヨリックが旅先でトラブルに巻き込まれるのは、イギリスとフランスがちょうど戦争中である時期に設定されているのは偶然ではない。パスポートがなくて投獄されるのは、「この国のありのままの情勢をスパイしに来た」(“come to spy the nakedness of the land”) (110) という容疑がヨリックにかけられるからに他ならない。あるいは、作品の一番最後のエピソードで、宿屋で見知らぬ婦人と寝室を共有しなければならないのは、ヨリックとその婦人はその部屋での規則を「平和条約の形式」(“form and manner of a treaty of peace”) (163) で明記するのだが、これも〈戦争〉との観念連合は容易だ。さらには、見ず知らずの婦人と寝室を共にするというこの設定自体が男女の性的な関係を連想させる。

つまり、〈交通〉を国家レベルに広げ〈戦争〉や〈貿易〉をその一形態とすれば、その〈交通〉というものを、人間、個人個人の関係、特に男女の関係でいうならば、〈性交〉というかたちで表現できる。ヨリックが女店主の脈をとる例の場面にもスターンがエロチックなほめかしを含ませているのは間違いないし、そこでは店先で堂々と妻を寝取られる亭主のイメージがさらにそのことを効果的にしていたことを想起されたい。

さらに、「循環」という言葉には物質的な交通のみならず精神的な交通も含まれている。つまり、〈交通〉、〈流通〉、〈交換〉、〈戦争〉、〈性交〉といったように、様々な形態で見てきた「循環」というものを、今度は〈コミュニケーション〉という観点から見れば、翻訳に関するエピソードや、“*unknown language at Paris*” (99)、つまりヨリックだけにわかる彼の母語で、“*I can't get out*”とだけ喋れるムクドリのエピソードもまた「循環」の一形態であることが理解できるであろう。籠の中のムクドリの姿にヨリックはパスポートがなければ投獄されるであろう自身の姿を重ね合わせていた。そして何より、この籠のムクドリがヨリックの手に渡る経緯というのが、ラ・フルールがヨリックのためにバーガンディ葡萄酒一本と〈交換〉したもので、さらに、ヨリックはイタリアから帰国する時、イギリスにつれて帰り、A卿に譲るのだが、その後ムクドリは、さらにB卿、C卿、D卿、E卿、とアルファベット順に次々飼い主を「循環」していくのは象徴的ではないだろうか。

付け加えるべきは、以上のような各エピソードを示すスターンの語りが一見行き当たりばったりに見えながら、そこには常に何らかの「脈絡」が存在するという「意識の流れ」の技法、いわば「血液の流れ」の技法とも言うべきもので、<sup>9</sup>これこそスターンが自らの作品の中で幾度となく言及する哲学者ジョン・ロックのいう「観念連合」(association of ideas)の原理の別名に他ならないと言うことだ。<sup>10</sup>

スターンは『トリストラム・シャンディ』において、「シャンディ精神」

（“Shandeism”）についてこのように述べていた。「真のシャンディ精神というものは、皆さん方がたとえ何とお心の中で悪く思っておられようとも、人間の心臓と肺臓を押しひらくもの、そしてこの精神と質を同じくするすべての情愛と同じように、人間の肉体に宿る血液とかその他の生命に関係のある液体とかを、その正常な進路に惜しみなく送りこむもの、そして生命の車を長く快活に回転させつづけるものなのですから」（4-32）。つまり、この「シャンディ精神」こそ『センチメンタル・ジャーニー』と題された本作品におけるセンチメンタリズムの原型なのであり、さらには、別の箇所で「シャンディ・システム」（“Shandean System”）（1-21）と名づけられるように、それはまさに一つのシステムに他ならない。そしてそのシステムとは何かと言えば、それは「心臓の動き」と「血液の循環」であったことはこれまで詳細に見てきたとおりである。ヨリックが“When the heart flies out before the understanding, it saves the judgment a world of pains”（22）と言う時、彼は理性と感情というものを人間精神の中での二項対立としてとらえているのではない。スターンが“heart”という場合、それは常に解剖学的、生理学的な対象としての「心臓」という意味が前面に出ていることを忘れてはならない。つまり、ここで二項対立にされているのは理性に代表される「精神」と、心臓に代表される「肉体」なのである。

### III

「精神」と「肉体」の二元論に立ち、動物機械論を唱え、さらにはハーヴェイに依拠しながら心臓と血液循環を詳細に論じたデカルトについて、スターンは『トリストラム・シャンディ』において幾度となく言及している。<sup>11</sup>すでに述べた“I can't get out”と機械的に繰り返すムクドリのエピソードも明らかにこのデカルトの動物機械論の変奏である。デカルトは身体を機械とみなすことによって「精神」を「肉体」から区別し、さらには、精神がないゆえに動物を自動機械とみなし、人間の身体も同様に機械論によって説明す

るが、精神を持つことで人間は動物から区別された。精神つまり理性は機械論的法則には支配されず、単なる機械にすぎない動物と区別され、肉体より精神に優位が置かれる。同じくスターンもデカルトの考えに賛同し、先に引用したように「フランスの筋金入りの女流唯物主義者たちだって、その唯物論全部をもってしても、先ずわたしを一個の機械と呼ぶことはできまい」とヨリックに述べさせる。さらには、狂った娘マリアのエピソード（『トリストラム・シャンディ』においてもこのマリアのエピソードは繰り返し語られ、スターンにとってこのエピソードがいかに重要であるかが推測できる）では、この女性と自分の涙を交互にハンカチでぬぐう機械的な動きを何度も繰り返しながら、ヨリックは “I am positive I have a soul; nor can all the books with which materialists have pester'd the world ever convince me of the contrary.” (151) と言っていた。しかし一方では『トリストラム・シャンディ』において、「人間の肉体と精神とは、これはそのどちらにも最大の敬意を払いつつ申すことですが、まさに服の表と裏のような関係で、——一方をしわくちやにすれば、——他方もそれにつれてしわくちやになってしまいます」(3-4) と、「精神」の「肉体」に対する絶対的優位を認めない発言をしたかと思えば、失恋で発狂したマリアのエピソードでは、語り手はこのように述べる。

MARIA look'd wistfully for some time at me, and then at her goat—and then at me—and then at her goat again, and so on, alternately—

—Well, Maria, said I softly—What resemblance do you find?

I do intreat the candid reader to believe me, that it was from the humblest conviction of what a *Beast* man is, — (9-24)

人間がただの動物に過ぎず、そして動物が自動機械であるなら、人間もまた

自動機械である。『トリストラム・シャンディ』の語り手は「世の中で何が苦手とって、私には機械のからくりを超える苦手はありません」(7-30)と韜晦する一方、自分たち一家及び『トリストラム・シャンディ』という作品自体をも「機械」に喩え(5-6)(7-1)、さらには人間自体も「機械」(6-17)や「この上なく精巧な車」(“the most curious vehicle”) (4-8)に喩える。デカルトは松果腺の仮説により生理学の方向から「肉体」と「精神」をつなげる努力を続けたがトリストラムはきっぱりと「さて父は、この件についてみずから入手しえた最上の記録類から、靈魂の宿る場所がデカルトの主張したように脳の松果腺の上だというのは、あやまりだという結論に達していました」(2-19)と証言する。

以上のことすべてが証明していること、それはデカルトの二元論に魅了されるとともに否定する、まさに共感と反感というスターンのアンビバレントな態度である。では、スターンはデカルトの機械論哲学のどの部分を瀉血しさり、どの部分を自らの思想に輸血したのか、スターンにとって「精神」と「肉体」との関係は一体どういったものなのか。『センチメンタル・ジャーニー』のマリアのエピソードでヨリックが「感受性」と「世界の偉大なる感覚中枢」へ呼びかける有名な場面を手掛かりにこのことを詳細に見てみよう。

— Dear sensibility! source inexhausted of all that's precious in our joys, or costly in our sorrows! thou chainest thy martyr down upon his bed of straw— and 'tis thou who lifts him up to HEAVEN! — eternal fountain of our feelings! — 'tis here I trace thee — and this is thy divinity which stirs within me — not that, in some sad and sickening moments, “my soul shrinks back upon herself, and startles at destruction”—mere pomp of words! —but that I feel some generous joys and generous cares beyond myself—all comes from thee, great—great SENSORIUM of the world! which vibrates, if a hair of our heads but

falls upon the ground, in the remotest desert of thy creation. (155)

先ず注目すべきは、“great SENSORIUM of the world!”と叫ばれ、ここに及んでにわかに強調され始めた「神経」についてである。確かに、本作品が出版された18世紀は「神経」というものが特権化された時代であった。カール・フィグリオによれば、18世紀末から19世紀初めにかけての生理学の著作においては、人間と動物の魂の本性に関する哲学及び心理学的研究と、それらの構造と機能に関する解剖学及び生理学的研究とを接続するものとして神経系が存在論的かつ方法論的に優勢を占めるようになり、「感受性」(“sensibility”)というものが身体と精神の出会う「基盤」(“matrix”)であると考えられるようになったという。<sup>12</sup>さらにはジョージ・ルソーにいたっては、魂を脳に局在させたトマス・ウィリス (Thomas Willis, 1627-75) による脳と神経の解剖学に関する著作とその出版が“sensibility”というものが文化的に特権化されていく過程において決定的な役割を果たしたと断定する。<sup>13</sup>つまり、そこに示されているのは心臓ならびに血液の循環に基づく機械論的な生理学から神経組織を中心とする生氣論的な生理学へのパラダイム転換である。<sup>14</sup>そしてこれまでもすでに『センチメンタル・ジャーニー』に関する研究において神経医学の言説との関係から論じられてきた。<sup>15</sup>しかしアン・ジェシー・ヴァン・サントも指摘するとおり、ハーヴェイの血液循環の発見は人間の内的機能と内的体験との類似性が成立する過程において、神経と脳に関するウィリスの著書と同じくらい重要であるのに、ルソーはそれをあまりにも過小評価している。<sup>16</sup>確かに、スターンもまた神経や脳に関する用語を多用していることは事実である。しかし、私たちはすでに『センチメンタル・ジャーニー』においてハーヴェイと血液循環説がいかに関係しているかを本稿の第Ⅱ章において詳細に検討してきたとおり、神経医学的な言説のみを強調することはもはやできない。それゆえ、本章では、『センチメンタル・ジャーニー』という小説が機械論的な生理学から生氣論的な生理学

への転換の過渡期的作品——機械論的かつ生氣論的作品——であると位置づけると共に、さらには、この機械論哲学それ自体がルネサンスの魔術的伝統の帰結である<sup>17</sup>ということがスターンのテキストの中においても実証されていることを確認することになるだろう。

ではさっそく先の引用文に戻ろう。アーサー・H・キャッシュはこのヨリックの“SENSORIUM”への呼びかけをニュートンの『光学』にある神の感覚器官をめぐる「ライブニッツ＝クラーク論争」への言及であると指摘している。<sup>18</sup> この呼びかけがニュートンへの言及であるという主張は理由のないことではない。というのも、若かりしスターンがケンブリッジ大学時代にロックとともに熱心に読み込んだ近代哲学者こそ、他でもないニュートンであったのだ。<sup>19</sup> しかし残念なことに、この神の感覚器官をめぐるライブニッツとクラークの論争は水掛け論に終始しているだけである。<sup>20</sup> むしろ私たちが注目すべきは、この論争において、ニュートン自身の哲学思想が、他の著書よりも詳細に述べられていることであり、さらには、この論争において両者の主張が常に収斂して行く場所こそ他ならぬ「神」であるということであろう。それでは、このニュートンの神学とは一体いかなるものなのか。

「私たちは、彼の探究の宗教的本質を見落としがちであり、みごとな成功をおさめた副産物を彼の主目標と取り違えてきた。ニュートンは自然を通して神を見ようと望んだのであり、晩年の彼が、自分とはときどき普通よりは滑らかな小石やきれいな貝殻を拾いあげる子供のようなもので、自分の前にはまるで手つかずの《真理》の大海が横たわっていると語ったのは、けっして韜晦ではなかった」と述べるB・J・T・ドブス (Betty Jo Teeter Dobbs) によれば、ニュートンにとってこの《神の真理》を探究する方法論こそが錬金術研究であり、彼の完成した科学の殿堂を支える柱のひとつであったと看破する。<sup>21</sup> 膨大なニュートンの錬金術文書及び実験記録を自在に渉猟するドブス女史の研究が示すように、ニュートンの神学が錬金術研究に深く関わっているとすれば、このニュートンの錬金術がデカルトの機械論哲学、ひ

いてはハーヴェイの血液循環説を軸とする『センチメンタル・ジャーニー』の解釈をめぐってどのような新たな光を当ててくれるのであろうか。

先ず注目すべきは、ニュートンの錬金術はルネサンス・ヘルメス主義と同時代の機械論哲学を統合しようという試みであり、デカルト哲学の修正ということが第二世代の機械論哲学者として出発したニュートンの錬金術研究の眼目であった、というドブス女史の指摘である。デカルトによれば私たちは精神と呼ぶものは、思惟 (*res cogitans*) という行為によって特徴付けられる実体であり、物質界は、延長 (*res extensa*) を本質とする実体である。この思惟と延長をデカルトは絶対的に区別するようなやり方で定義したのだが、彼が精神の領域を特徴付けるために“*cogitans*”という能動分詞を用い、物理的自然にはこれと対照的に“*extensa*”という受動分詞を用いたことは、物理的自然が不活性で、自ら活動源をもっていないということを強調するのに役立った。<sup>22</sup>そしてニュートンにとって、この受動性と能動性をめぐる問題、機械的力と非機械的力をめぐる問題のすべては彼の一連の試みの中に組み込まれることになる。その錬金術研究のはじめから自然界に働く生長をもたらす原理 (*vegetative principle*) の存在の証拠を見出すことに興味を持っていたニュートンは、その原理が錬金術師の語る秘密の普遍的な《活性化する精》 (*animating spirit*) であると理解し、そしてまた、錬金術の工程と世界創造時における神の御業とのあいだにアナロジーを見ていた。要するに、この錬金術における能動的な生長原理の働きこそがデカルトが主張したような機械的システムとを隔てているものなのだ。

では、錬金術における能動的な生長原理の働きとは実際どのようなものなのかといえば、それは「照明」 (*illumination*) と「醗酵」 (*fermentation*) の過程である。照明は錬金術において象徴的、隠喩的な意味を持つ。光は死せる物質を活性化ないしは再活性化することのできる神の力を表象する。そして、物質がひとたび照明されると醗酵をはじめ、照明が活性化の過程であったとすると醗酵は生み出された活性である。注目すべきは、醗酵

(ferment) という語はその錬金術的意味よりもはるかに多くのものを含んでいるということだ。もともと「沸騰する」を意味するラテン語“fervere”に由来する醗酵という語はどんな沸騰過程にも当てはめることができた。<sup>23</sup> アナクシマンドロスにまでさかのぼる伝統の中では、生命は太陽に温められた湿った土壌の中の醗酵素から生ずるとされ、アリストテレスにおいては、生命の座である心臓は醗酵によって活気づき、沸騰ないし醗酵する液体のごとく交互に膨れ上がったり潰れたりする。そして、ファン・ヘルモントのその革新的な生理学の中ではこの醗酵の概念に高い地位が与えられ、<sup>24</sup> さらには、この醗酵という概念は早くからデカルトの機械論哲学の中にも取り入れられていた。動物の発生において雌雄の分泌液が互いに他に対する醗酵素として働き、この醗酵による働きかけが熱を掻きたて、その熱は諸粒子をさまざまに結合し、心臓などが形成され始める。デカルトがこうした醗酵過程に類比させるのが、パン生地膨張、ビールの醸造、葡萄酒の発泡、湿った干し草の堆肥化である。人間の場合でも、その心臓は湯沸し器となり、その熱は醗酵の熱と類似のものとされている。つまり、デカルト自身は機械論的な過程として説明したつもりになっているが、彼の考える発生あるいは人間の機械論的システムのまさに中心には、曖昧な醗酵概念が潜んでいるのだ。

本稿の第Ⅱ章におけるテキスト解釈ですで見たとおりヨリックが旅先のフランスで消化不良で死ぬことを心配していた場面で、消化器系から循環器系への移行が行われたのは理由のないことではなかったことが今や理解できるであろう。<sup>25</sup> デカルトは消化のシステムを醗酵の概念によって説明していたし、醗酵はその語源からしてあらゆる沸騰過程に当てはまった。ある意味、心臓を湯沸し器と見るデカルトにとって醗酵もまた「循環」の一形態であるのだ。これと同じように、当時の文献ではよく見られたことであったが、「循環」という語には多様な意味があった。ひとつには、心臓の収縮と拡張のような周期的な繰り返し運動という意味であり、そして化学的な意味としては、蒸留と関係付けて血液が心臓で温められ、肺で凝縮することを示唆し

た。ハーヴェイにしてみても、確かに心臓をポンプと見たが、単にポンプとして見ただけではない。血液の循環は蒸発と雨の循環を思い起こさせるだけでなく、<sup>26</sup>それを引き起こす天体の円運動に匹敵し、この円運動によってあらゆる生物の発生がもたらされる。ハーヴェイにとって、血液の循環とは、宇宙及びその中に含まれるすべてのものを維持する方法である周期的な再生を繰り返すものである。誕生、生殖、死という周期的な変化の中に、彼は地上の生物の発生と腐敗を決定する永遠的な軌道のもうひとつの反映と体现を見た。それは人間の体と世界の体の、すなわち、人間というマイクロコスモスと宇宙というマクロコスモスの間の照応性である。マイクロコスモスとは、その構造ないし過程のうちにマクロコスモスの本質的特徴を集約している世界であり、人間そのものが構造的なマイクロコスモスであり、物理的あるいは政治的世界はそれと類比的な有機体として描かれる。そしてさらには、人間だけが唯一のマイクロコスモスではなく、ニュートンの言う錬金術の工程、錬金術の大いなる作業は、ある意味で大きなコスモスの誕生の過程を集約しているのだ。

ニュートンが初期に出会った純粋なデカルト流の機械論は、まもなく彼の論考のいくつかで、能動的原理を付加されることによって修正を受けた。そしてその能動的原理こそが錬金術における生長作用であり、この錬金術における生長作用に焦点をあてるなら、既に見た作品冒頭におけるフランス国王への非難と和解のエピソードで、ヨリックが述べる“*I rose up an inch taller for the accommodation.*” (5) という台詞が重みを増すであろうし、そして何より、ヨリックが“*this poor blighted part of my species, who have neither size or strength to get on in the world*” (80) のその原因について解明を企てようと長々と思索にふける「小人」(THE DWARF) と題されたセクションの挿入が唐突のものではないことが理解できる。<sup>27</sup>そして錬金術そのものに関しては、『トリストラム・シャンディ』の語り手は自らの一門にここ前後四世代はめぼしい先祖はほとんどいないが、「十六世紀ごろ

にはわれわれの入門は、錬金術師だけでも実に十二人という隆盛さだった」(8-3)と述べていたではないか。

そればかりではない、『センチメンタル・ジャーニー』におけるムクドリのエピソードで、女神に訴えかけるヨリックは、これら錬金術と生理学のイメージを見事に融合してみせる。

— no *tint* of words can spot thy snowy mantle, or chymic power turn thy sceptre into iron — with thee to smile upon him as he eats his crust, the swain is happier than his monarch, from whose court thou art exiled—Gracious heaven! cried I, kneeling down upon the last step but one in my ascent—grant me but health, thou great Bestower of it, and give me but this fair goddess as my companion — and shower down thy mitres, if it seems good unto thy divine providence, upon those heads which are aching for them. (96)

面白いのは「錬金術 (“chymic power”) が汝の黄金の笏を鉄に変える」というように実際の錬金術の工程とは正反対の表現を用いヨリックが女神を称えていることである。そして彼は「健康を恵み給う神」に、良好な血液循環の指標たる「健康」だけを望み、<sup>28</sup>さらには「あなた様の冠を雨と降らせる」と地球の循環たる気象学的表現で締めくくる。

錬金術と生理学のイメージを使った表現はここだけではない。施しをうまく女性からせしめることができる男の謎についてヨリックは “but a secret, I thought, which so soon and so certainly soften’d the heart of every woman you came near, was a secret at least equal to the philosopher’s stone: had I both the Indies, I would have given up one to have been master of it.” (130) と述べていた。ここでは、謎を「賢者の石」という錬金術の用語で喩え、それを「東西両インド」のどちらかと交換してもいいという地理学的表現にシフトさせていることに注目しつつ、さらには、この男

の秘訣が「お世辞」(“flattery”)であることを後に発見したヨリックはすぐそれに血液循環による表現を与えていることを次の引用に確認しておこう。“how sweetly dost thou [flattery] mix with the blood, and help it through the most difficult and tortuous passages to the heart!” (144)

ハーヴェイの発見は、コロンブスのアメリカ発見と同じ値打ちがあるというサー・トマス・ブラウン (Sir Thomas Browne, 1605-1682) の評価<sup>29</sup>は、コロンブスが新大陸の発見により地球の円さを証明して見せたように、ハーヴェイが血液循環を発見したことによって医学、生理学が新しい時代へと開かれたというだけでなく、生理学的発見が地理学的発見へ、つまり、ミクロコスモスからマクロコスモスへといかに容易に表現が移行できるのかを図らずも示している。この大宇宙と小宇宙の関係でいえば、ハーヴェイが『動物の心臓ならびに血液の運動に関する解剖学的研究』を出版した時、ジェームズ・プリムローズ (?-1659)、カスバル・ホフマン (1572-1648)、ジャン・リオラン (1580-1657) 等、当時の名だたる解剖学者たちの反論があった中、彼の血液循環に関する見解を公刊物の中で最初に支持したのはロンドンで開業するパラケルスス派の医師ロバート・フラッド (Robert Fludd, 1574-1637) であったのは注目に値する。薔薇十字友愛団の主要代弁者と広く認められるフラッドの思想は、ルネサンスの魔術とカバラの系譜を引き、それにパラケルスス流の錬金術とジョン・ディー (John Dee, 1527-1608) の強い影響とが加味されたもので、マクロコスモス=ミクロコスモス哲学にもっとも完成された表現を与えた。<sup>30</sup> 今や『センチメンタル・ジャーニー』における血液循環説及びその錬金術的表現の系譜——そのハーヴェイ、デカルト、ニュートンと脈々と流れるその源流——をこの神秘主義的錬金術師にまでたどることができる。そればかりかフラッドがハーヴェイの親友であり同僚であり、彼の解剖に幾度となく立ち会っていたこと、さらにはハーヴェイの発見を喜び、その成果を出版へとすすめる手助けをしたという伝記的事実を確認することもあながち無駄ではない。フラッドにとって、天体の循環運動が

人間という小宇宙の血液において繰り返されるというハーヴェイの発見は、マクロコスモス＝ミクロコスモスの関係が存在している何よりの証拠であった。すでに見たように、ハーヴェイ自身もこのアナロジーを自著の中で繰り返していた。ウォルター・パーゲルにいたってはむしろフラッドの思想がハーヴェイをこの発見へと導いたひとつの要因であったかもしれないと示唆している。<sup>31</sup>

さらに注目すべきは、連作『両宇宙誌』はもちろん、その他のフラッドの著書には、本文と密接かつ正確に一体となり、本文にある細かい事項を忠実にたどる精巧な図版が非常に多く含まれている事実であり、この図解、象形文字、象徴記号を用いた記述こそ、フラッドの哲学をあらわす本質的な方法であることである。<sup>32</sup> これらの図版は単に本文への図解として作り出されたものではなく、象徴的な視覚表現によって、その本文の真の意味を把握し、それを記憶に明記する方法として作り出されたものである。図版において自分の論旨に正確な視覚表現を与えることは、フラッドが明らかに重要視していたことであったのだ。そして、フラッドの自著に対するこの印刷技術的こだわりは、スターンにもまた相通じるものである。『トリストラム・シャンディ』では、真っ黒に塗りつぶされたページ、空白のページ、マーブル模様ページ、片面ラテン語片面英語のページ、さらには不規則な曲線が何本も描いてあるページ等が頻出し、その内容と形式が見事に相乗効果をあげていた。そして『センチメンタル・ジャーニー』においては印刷技術的により洗練された表現を与えられることになる。それは作品のほぼ中央にあるムクドリ紋章の挿絵である。『トリストラム・シャンディ』と違い印刷技術的な遊びをストイックにおさえ通した本作品において、テキストのほぼ中央にあえて挿入されたこのハート型の紋章の絵は、図らずも本作品の心臓を表象しているのではないだろうか。そして本文におけるダッシュ記号の多用もまた同じように印刷技術的観点から見れば、テキストというひとつの身体に張り巡らされた血管網に他ならない。<sup>33</sup> つまり、印刷技術でもって心臓の動きと

血液の循環が見事に視覚化されているのだ。かくして、『センチメンタル・ジャーニー』というスターンの小宇宙はゲーテンベルクの銀河系へと接続されるのである。

#### IV

スターンによるヨリックをはじめとする登場人物たちの感受性の描写は、彼らがすぐに「顔を赤らめる」ことに始まり、さらにはそれを生理学的、機械論的説明に還元する技法であった。その際、彼が依拠したのは既に詳細に見てきたようにハーヴェイの血液循環説であったが、それはデカルトの機械論哲学によって奇妙な形に修正されたアマルガム、すなわち機械論的かつ生氣論的な身体モデルであった。そして、本稿において私たちはスターンのミクロコスモスたる『センチメンタル・ジャーニー』というテキスト自体がその内容と形式の双方において血液循環の原理によって構成されていることを確認するに留まらず、機械論的な血液循環説及びその変奏たる錬金術的表現の系譜がスターンという心臓を中心に思想史、自然科学史というマクロコスモスをも「循環」する様を観察することができた。

“Sentimental Traveller”たるヨリックは、行く先々ですぐに感傷的になり、赤面し、涙し、恋に落ちる、まさに感傷機械であり、赤面機械であり、号泣機械であり、発情機械である。ヨリックのこのセンチメンタルな身体に宿る魂の場所は、脳でもなければ松果腺でもなく、さらには心臓でもなく、あえてその「場所」を特定するならば「血液の循環」という動きそのものに宿っていると付け加えるならば蛇足であろうか。

## 注

- 1 夏目金之助「トリストラム、シャンデー」, 『漱石全集』(東京: 岩波書店、1995年), 第十三巻, 72.
- 2 Laurence Sterne, *A Sentimental Journey Through France and Italy by Mr. Yorick*, (*The Florida Edition of the Works of Laurence Sterne*, edited by Melvyn New, Joan New and W.G. Day, 6 vols. [Gainesville: University Press of Florida, 1978-2002]). スターンの作品からの引用は上記の版に拠るものとする。なお煩雑を避けるため *A Sentimental Journey* はページ数を *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman* に関しては巻号と章番号を本文中に明記する。*Tristram Shandy* からの日本語での引用は朱牟田夏雄訳『トリストラム・シャンデー』を用いたが、一部変更した箇所もある。
- 3 *A Sentimental Journey* において登場人物たちは頻繁にすぐに「顔を赤らめる」。以下はその一例である。“The poor monk blush'd as red as scarlet. *Mon Dieu!* said he, pressing his hands together—you never used me unkindly. —I should think, said the lady, he is not likely. I blush'd in my turn”(26); “I thought she blush'd —the idea of it made me blush myself —we were quite alone; and that super-induced a second blush before the first could get off” (121).
- 4 *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. (New York: Oxford University Press, 1989), s.v. “sentiment,” “sentimental,” “sensitivity.”
- 5 スターンの “sentiment” は *OED* の語義 9.a にある “Refined and tender emotion; exercise or manifestation of ‘sensitivity’” の意である。その最初の用例として *A Sentimental Journey* の冒頭, ヨリックがフランス人の気質をたたえる箇所 “tis the monarch of a people so civilized and courteous, and so renown'd for sentiment and fine feelings, that I have to reason with” が引用されている。
- 6 ハーヴェイはチャールズ一世への献辞において次のように述べている。

動物の心臓はその生命の礎石であり、その身体の重要な部分であり、その小宇宙の太陽であります。動物の活動のすべては、心臓に依存しており、生命の躍動と力のすべては、心臓から発起します。それはあたかも、国王がその王国の礎石であり、その小宇宙の太陽であり、その国家の心臓であって、すべての権力が国王から発動し、あらゆる恩恵が、国王にその源を発するのと、まったく同様であります。……陛下御自身の心臓についての御理解は、かくて、非常に特殊な映像としての国王御自身の機能についての、——〔このような比較は〕まことに恐懼の至りでさえありますが——陛下の御理解のお役に立つてありませう。至上の陛下！あなたは人間関係の最高にあられますから、あなたは、少なくとも、人の身体を中心である臓器と、それに似て

いるあなた御自身の王権の表徴との二つを同時に省察され得られるでありましょう。(ウイリアム・ハーヴェイ『動物の心臓ならびに血液の運動に関する解剖学的研究』暉峻義等訳、東京：岩波書店、1961年)。

Christopher Hill, "William Harvey and the Idea of Monarchy," Charles Webster ed., *The Intellectual Revolution of Seventeenth Century* (London: Routledge and Kegan Paul, 1974), 160-181 も参照のこと。

- 7 王それ自体の永遠性と個人としての王の時間性、王の非物質的で不可死の政治的身体と物質的で可死的な自然的身体との区別についてはエルンスト・H・カントーロヴィチ『王の二つの身体』上下、小林公訳（東京：平凡社、2003年）を参照のこと。
- 8 付け加えるなら、ラ・フルールの特技が「太鼓をたたく」("drum beating")であると設定されているのは心臓が"beat"することと無関係ではない。トリストラムも言っていた。「太鼓のなるのを聞けばわたしの心臓もそれにつれて高鳴りせずにはいられなかった」(6-32)と。さらに、ここで記憶に留めておくべきは、何もできないラ・フルールを雇ったことについて、ヨリックが"I was satisfied to my heart's content with my empire" (42)と、自ら一行をも「帝国」と名乗り、マクロコスモスたるフランスという帝国に対するミクロコスモスとして位置づけていることである。
- 9 ヴァージニア・ウルフは『センチメンタル・ジャーニー』について「旅行案内書に詳しく述べられている街道よりも、自らの心の紆余曲折を選んだという点で、スターンは例外的に私たちの時代に属している」と評価し、「意識の流れ」を扱う20世紀の文学に接続している。(Virginia Woolf, "The 'Sentimental Journey,'" *The Common Reader: Second Series*, [London: Hogarth Press, 1932], 81) .
- 10 スターン自身も、この観念連合のことを血液の動きの中心である心臓と関連付けている。「ある種の観念の連続は、われわれの目や眉毛のあたりにその跡を残すものです。同時にどこか心臓のあたりにそれを意識するものがあって、これこそがその顔に刻まれたものの効果をいちだんと強めるのに役立ちます——われわれはそれを見、つづり合わせ、組み合わせて、辞書の助けなど借りないでも用を足すのです」(5-1)。
- 11 血液循環説がデカルトによって新たな聴衆に届けられた事実はスターンと血液循環説を論じる本稿においても十分に考慮される必要がある。スターンの伝記を調べれば、人生の節目ごとに句読点を打つかのごとくたびたび咯血を繰り返した病弱なスターンが医学や生理学に関心を示したであろうことは容易に想像ができ、彼がハーヴェイの著書に直接親しんでいた可能性も十分に考えられる。しかし、スターンがハーヴェイの著書を読んだかどうかといった確証できない事柄を脇へ置くとして

も、少なくとも、血液循環説というものをデカルト経由で修正された形で間接的に知ることとなったのは確実である。

ハーヴェイの発見の影響、及びデカルトとの関係については Roger French, *William Harvey's Natural Philosophy* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994) 及び『デカルト著作集』全4巻(東京:白水社, 2001年)を参照のこと。

- 12 Karl M. Figlio, "Theories of Perception and Physiology of Mind in the Late Eighteenth Century," *History of Science*, 12 (1975), 177-212.
- 13 G. S. Rousseau, "Nerves, Spirits, and Fibres: Towards an Anthropology of Sensibility," in *Enlightenment Crossings*, Manchester University Press (1975-76; 1991), 122-41; Idem, "Discourses of the Nerve," in Frederick Amrine ed., *Literature and Science as Modes of Expression*, Boston: Kluwer Academic Publishers (1989), 29-60; Idem, "Towards a Semiotics of the Nerve: The Social History of Language in a New Key," in Peter Burke and Roy Porter, eds., *Language, Self and Society: A Social History of Language*, Cambridge: Polity (1991), 213-75.
- 14 Theodore M. Brown, "From Mechanism to Vitalism in Eighteenth-Century English Physiology," *Journal of the History of Biology* 7 (1974): 179-216; Sergio Moravia, "From *Homme Machine* to *Homme Sensible*: Changing Eighteenth-Century Models of Man's Image," *Journal of the History of Ideas* 39 (1978), 45-59.
- 15 John A. Dussinger, "The Sensorium in the World of 'A Sentimental Journey,'" *Ariel* 13 (1982), 3-16; Idem, "Yorick and the 'Eternal Fountain of our Feelings,'" in *Psychology and Literature in the Eighteenth Century*, ed. Christopher Fox (New York: ASM Press, 1987), 259-276. Nobuyoshi Saito, "A Journey Through the Heart: Mind and Space in Laurence Sterne's *A Sentimental Journey*" 『同志社大学英語英文学研究』64 (同志社大学人文学会, 1995). Dussinger は先のヨリックによる「感覚中枢」への呼びかけを、18世紀の医学的言説 (La Mettrie, Jerome Gaub, Robert Whytt) と関連付けている。Saito はより広い射程で先の引用箇所に関する18世紀の言説を概観するに留まらず、20世紀の空間と主体性をめぐる哲学的問題へと接続している。
- 16 Ann Jessie Van Sant, *Eighteenth-Century Sensibility and the Novel* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993), 12.
- 17 フランセス・A・イエイツは近代科学の本質的要因の多くを魔術にあったという観点から、機械科学の成長をルネサンスの魔術的伝統の帰結であるとみなしている。「機械科学の成長は、容認しうる自然哲学として機械論という着想を生んだが、しかしそれ自体がルネサンスの魔術的伝統の帰結であったということは、思想史上の

もっとも皮肉な逆説のひとつである。魔術からのがれた機械論が、ルネサンスのアニミズムを追い払い、『降霊術師』のかわりに機械論哲学者を登場させるような哲学となったのである」（フランセス・A・イエイツ『薔薇十字の覚醒——隠されたヨーロッパ精神史』山下知夫訳（東京：工作舎、1986年）、166）。

18 Arthur Hill Cash, *Sterne's Comedy of Moral Sentiments: The Ethical Dimension of The Journey* (Pittsburgh, Pa.: Duquesne University Press, 1966), 94. 及び Stout による注も参照のこと。Laurence Sterne, *A Sentimental Journey Through France and Italy by Mr. Yorick*, ed. Gardner D. Stout (Berkeley: University of California Press, 1967), 353-4.

19 Arthur Hill Cash, *Laurence Sterne: The Early & Middle Years* (London: Methuen, 1975), 50-1.

20 ライブニッツとクラークの論争はニュートンが『光学』の〈疑問28〉において空間というものが神の感覚器官であるという言及をしたことをめぐるものである。「動物の感覚中枢とは、感覚物質が敏速に應じる場所であり、事物の感知される形象は、神経と脳をへてそこに運ばれ、感覚物質に即座に應じることによって知覚されるのではないか。このようなことが敏速にうまく処理されているのであるから、無形の、生命ある、聡明な、遍在的な神がいますことは諸現象から明らかではないか。かれは無限の空間で、それがあたかもかれの感覚中枢であるかのように、事物が即座にかれに應じることにより、事物それ自体を深く見通し、徹底的に知覚し完全に理解する」というニュートンの発言に対しライブニッツは、「ニュートン氏は、空間というものが神が事物を感覚するために用いる器官だ、と言っています。しかし、もし事物を感覚するための何らかの手段を神が必要とするならば、事物は完全には神に依存することにならず、神の生産物ではなくなってしまいます」と非難する。これによってライブニッツとニュートンのスポークスマンたるサミュエル・クラークとの手紙の応酬は、結局ライブニッツの死が文通に終止符を打つまで五回にわたることになる。（ニュートン『光学』鳥尾永康訳、東京：岩波書店、1983年；ライブニッツ「ライブニッツとクラークとの往復書簡」佐々木能章、米山優訳『ライブニッツ著作集(9)後期哲学』、東京：工作舎、1989年）。

21 B・J・T・ドブス『錬金術師ニュートン——ヤヌスの天才の肖像』大谷隆昶訳（東京：みすず書房、2000年）、11；Idem『ニュートンの錬金術』寺島悦恩訳（東京：平凡社、1995）も参照のこと。

ニュートンを「最後の魔術師」と呼び、彼の錬金術師としての側面をセンセーショナルに最初に強調したのはケインズであったが、この分野に関する数多くの研究がなされた今となってはニュートンの錬金術はもはやスキヤンダルではなくなった。ニュートンの錬金術については以下も参照のこと。J・M・ケインズ「人間

- ニュートン」大野忠男訳（中山伊知郎〔他〕編『ケインズ全集 第10巻 人物評伝』、東京：東洋経済新報社、1980年）；リチャード・S・ウェストフォール「ニュートンの生涯における錬金術の役割」（ボネリ／シェイ編『科学革命における理性と神秘主義』村上陽一郎・大谷隆昶・横山輝男訳、新曜社、1985年）；Idem『アイザック・ニュートン』I・II、田中一郎・大谷隆昶訳、（東京：岩波書店、1993年）；ピエール・チュイリエ『ニュートンと魔術師たち——科学史の虚像と実像』高橋純訳（東京：工作舎、1990年）；チャールズ・ウェブスター『パラケルススからニュートンへ——魔術と科学のはざま』神山義茂・織田紳也訳、金子務監訳（東京：平凡社、1990年）。
- 22 リチャード・S・ウェストフォール『近代科学の形成』渡辺正雄・小川真理子訳（東京：みすず書房、1980年）、46。
- 23 *The Oxford English Dictionary*, s.v. “ferment,” “fermentation.”
- 24 ファン・ヘルモントの醗酵の概念については、Walter Pagel, *Joan Baptista Van Helmont: Reformer of Science and Medicine* (Cambridge: Cambridge University Press, 1982) を参照のこと。
- 25 『トリストラム・シャンディ』においても、何事にも一家言あるウォルター・シャンディの風変わりな数々の意見の生成、確立の経路を「酵母菌のような作用」と関連付けているし(1-19)、「頭のとっぺんから足の爪先まで感受性そのものようだった」ウォルターは「酸味をおびた体液」が「沸騰」することで気分が決まると述べられている(9-1)。また、小説における「脱線」というものが「日光」、さらには「食欲」に喩えられ(1-22)、別の箇所では、激情や心の動きが「消化」に与える影響について語られている(2-1)。
- 26 「この運動は、アリストテレスが天候と雨とを上界の循環運動になぞらえたと同じ意味において、循環運動と名づけられてよいものである。なぜならば、湿ったそして太陽に暖められた土地は水蒸気を蒸発させ、上昇した水蒸気は凝縮し、雨となって再び降り、それが土地を潤す。そうして太陽の循環、すなわちその接近と遠離とによって、暴風雨その他の気象現象が発生するのである。身体各部は暖められた、完全な、しめった、生気に満ちた、そして余をしていわしめれば、すなわち、養価の高い血液の循環によって養われ、十分に暖められかつ生気づけられると、やがて反対に身体各部の血液は冷たくなり、濃縮され、生気がなくなること、したがってそれがもとの完全に復するためには、再びその源泉である心臓、いわばその泉であり、すなわち身体の神棚であるところにかえってくることはまちがいのないことであろう。そこで血液は再び自然の力強い、火のような、生命の宝である熱によって、新たに流動性となり、生気をもって、かついわば、香油をもって飽和され、ここから再び身体各部へ配分される。そしてこれらすべての事は心臓の拍動によってなさ

- れる。こうして、あたかも太陽が、同じ状態において、宇宙の心臓である、という名をもっているように、心臓は生命の源泉であり、「【小】宇宙の太陽である」（ハーヴェイ、92-3）。
- 27 『トリストラム・シャンディ』のスラウケンベルギウスの物語において、鼻の発育に関して、栄養の観点から述べられ、「人間の鼻がその人間自身の大きさまで発育することはできないとする原因は自然の中にはない」というところまで行き着く。
- 28 『トリストラム・シャンディ』では、「健康」は「黄金」にまさると称えられ、健康を保つには、余分な体液を排泄し「循環に故障なからしめるために」洗腸をおこなうことの必要を説いている。「健康の全秘訣」を述べるにあたりファン・ヘルモントへの直接的な言及も行われている（5.33-5.36）。
- 29 Sir Thomas Browne, *Letters*, vol.4 of *The Works of Sir Thomas Browne*, ed. By Geoffrey Keynes (Chicago : University of Chicago Press, 1964), 255.
- 30 ロバート・フラッドと彼の著作についてはフランセス・A・イエイツ『世界劇場』藤田実訳、（東京：平凡社、1978年）、Idem『薔薇十字の覚醒——隠されたヨーロッパ精神史』、及び Allen G. Debus, *The Chemical Philosophy: Paracelsian Science and Medicine in the Sixteenth and Seventeenth Centuries* (1977; New York : Dover Publications, 2002) を参照のこと。
- 31 Walter Pagel, *William Harvey's Biological Ideas : Selected Aspects and Historical Background* (Basel ; New York : S. Karger, 1967), 113-18. なおハーヴェイとフラッドの関係については Allen G. Debus, "Robert Fludd and the Circulation of the Blood," *Journal of the History of Medicine*, XVI (1961), 374-93; Idem, "Harvey and Fludd: The Irrational Factor in the Rational Science of the Seventeenth Century," *Journal of the History of Biology*, 3 (1970), 81-105 も参照のこと。

M・H・ニコルソンは17世紀初めの科学書一般とは異なりハーヴェイの著書は明快で飾りのない文体による実際の入念な報告からなり、そこには当時の「自然誌」一般に見られるような哲学議論、あるいは詩及びいかなる種類の暗示の意味も含まないと指摘し、アニミズムではなく機械論メカニズムに向かうハーヴェイは、古い書き方を捨て去ると同時に古い考えも捨て去ったと述べている。確かに、ハーヴェイの文体においては女史の指摘するとおりであるが、彼の思想においては、パーゲルがそのパラケルスス論の中で、ハーヴェイとファン・ヘルモントは定量的研究方法と哲学的神秘主義を結びつけることで17世紀医学の基礎を築いた重要な人物であると述べているように、アリストテレスの絶大な影響下にあるものの、あくまで両者ともいまだパラケルススのパラダイムのもと彼らの偉大な科学的発見を成し遂げたのは間

違わない。(M・H・ニコルソン『円環の破壊——17世紀英詩と〈新科学〉』小黒和子訳, [東京:みすず書房, 1999年]; Walter Pagel, *Paracelsus: An Introduction to Philosophical Medicine in the Era of the Renaissance* (Basel, New York, Karger, 1958)).

- 32 フラッドの著作の図版解説についてはジョスリン・ゴドウィン『交響するイコン——フラッドの神聖宇宙誌』吉村正和訳(東京:平凡社, 1987年)を参照のこと。入手しやすいフラッドの著作のアンソロジーとしては *Robert Fludd*, ed. by William Huffman (Berkeley, Calif.: North Atlantic Books, 2001) がある。
- 33 Ian Watt はスターンのダッシュは秩序あるシンタックスを転覆する多様性へ到達するための手段であると述べ, Max Byrd は, スターンのダッシュは会話の引用の区切り, 長い要約や同格句の挿入, あるいは演劇的身振りを示すといった18世紀の慣習的な使用方法であると指摘している。能美龍雄は空間的, 視覚的に連続するもの一時中断を示しながら, かつ継続を強調することのできるダッシュをスターンが特に好んで多用したと指摘する。しかし, 本稿においては心臓の動きと血液循環というタイポグラフィカルな観点からあえてスターンのダッシュはテキストという身体に張り巡らされた血管網の表象であると解釈した。(Ian Watt, "The Comic Syntax of *Tristram Shandy*," in Howard Anderson and John S. Shea eds., *Studies in Criticism and Aesthetics, 1660-1800* [Minneapolis: University of Minnesota Press, 1967], 321; Max Byrd, *Tristram Shandy* [London: George Allen & Unwin, 1985], 70; 能美龍雄「スターンとダッシュ——『センチメンタル・ジャーニー』の場合」『十八世紀イギリス文学研究』日本ジョンソン協会編 [東京:雄松堂出版, 1996年]).